

個人主義か家族主義か

東京帝國大學文科大學
助教授 文學士

深 作 安 文

自分は、今日我が國で、家庭に於ても廣く社會

國家に於ても、是非解決をせぬばならぬ問題があ

ると思ふ。それは個人主義と團體主義の調和とい

ふ事である。個人主義といふのは、文字の示す通

り個人に絶體の價值を認めて、個人の屬する家庭

なり、社會國家なり、ついで云へば、凡べて團

體の價值を第二位におく主義である。また團體主

義とは、家庭なり、學校なり、銀行會社なり、廣く

社會國家なり凡べて凡べて團體の價值を重んじ

て、之に屬する個人の價值を第二位におく主義で

ある。西洋の思想信仰の根底は個人主義であると

いふ事は改めて云ふまでもない。此主義が恰度大

洪水のやうにまた暴風のやうに我國に進入し來つ

て、只今述べたやうな種々の團體によつて立つ團

體主義と衝突を來して居る事は確な事實である。

此の衝突は、我々が是非とも解決を急がねばなら

ぬものである。自分は、團體の中から特に家族を

取つて其據つて立つ家族主義と個人主義との衝突

する所以を述べ、之が解決の方法について、いさ

ゝか思ひついた處を述べて見やうと思ふ。

個人主義には種々の長所がある。其主なるもの

を云はうならば、其一是、どこまでも人格の價值

を尊ぶ事である。男女の別も、貴賤の差も悉く之

を取り去つて、人そのものゝ價值を重んずる事だ

ある。こゝから、人の自由なり、權利なりの觀念

が明になつて來るのである。従つて其の二は、此

主義は個性の發展を重んずるのである。我々は各

面の異つてゐるやうに天賦も個人によつて違つて

居る。此の個性をどこまでも發達させる事は之を有して居る一個人の上から考へても、また廣く諸々の團體の上から考へても大切な事である。その三は、此の主義は、どこまでも人の自尊心を重んじる。既に己れは一個の人格である。自主獨立の生活をなすものであるといふやうな考からして、容易に他人に膝を屈しないといふやうな、我を重んじ、我を尊ぶ思想が生じて來る、その他にも種々様々あらうけれども、是等が個人主義の主なる特色と思ふ。

次に家族主義にうつて其特色を考へて見やうに、此の主義は、家族の人々の結合協同による事を眼目として、相互の愛情を養ひ、家庭の情味を貴ぶのである。人の此の世に生れて始めて生活する所は、云ふまでもなく家庭であるから、かやうな家族主義の下に立つて居る家となる子女は大に幸福なるものと云はねばならない。そこで長者に對する服従心尊敬心なども養ふ事になる、其

二は、此主義のもとに立つて生活するものは、自ら特種的精神を養ふ事になる。何に致せおのが家族おのが家と云ふものが大切であると云ふ事が常に教へられるのであるからして、家の爲め家族の爲めには我を擲^{なげ}たねばならないといふ氣象精神を養ふ事になるのである。此の特種的精神をすつとおしひろめて來ると、忠君とか愛國とか云ふやうな國家道德の根底なるべき道德心となるのである。

その三は、家族主義の行はれる國家の人情風俗は如何にも濃厚なる事である、と云ふのは、どこまでも己の長者を敬ひ老人を尊び、ひいては幾代も^の祖先にも溯つて、その恩義を感謝する事を教へられるのであるから、かやうな家が組み立てる國家が自然濃厚なる風俗習慣を有する事になるのは、少しも不可思議でないのである。

個人主義の特色と家族主義の特色とは、大體上に述べたやうな次第であるから、此の兩主義のもとに立つ生活がいろ／＼の衝突、いろ／＼の波

淵を生じて來るのは當然の理である。此の際我々は果してどちらに従ふべきであらうか、個人主義に従つて行動すべきであらうか、乃至は家族主義の方に組みすべきであらうか、これはたしかに我々の目の前に横はつて居る大なる疑問である。我々は有形に無形に、西洋の文物の取り込まれた社會國家に生活して居る以上、知らずくよほど個人主義的になつて居るのである。が父あり母あり祖父あり祖母あり、下つては妻もあり子もあつて、遠い祖先から何代となく歴史的に發達し來つた家の中に住んで居る以上、少しも家族主義の精神を顧みないと云ふわけにいかない、況してや、我が日本國は、國を建て、此のかたの家族主義であつて、國家が今日まで此主義のもとに存続し來つたものである以上は、少しも此主義に對して考へる事のないといふ事は出來ない、こゝが此の兩主義の調和を是非はからねばならない理由の主なるものである。

さて、此兩主義の調和は之をどうすればよろしいかと云ふに、之には種々さまざまの方法があると思ふ。まづ家の内外にわけて考へて見ると、家中では父母長者が其頭に、家族主義から來る所の種々の弊害をおいて其子女に對するといふ事が、その一つの方法と思ふ。家族主義の生み出す弊害には種々様々あるが、その主なるものは、恰度前に述べた個人主義の特色の裏をゆくものであつて、子女の人格の價値を認めない事の如き、従つてその意志を尊重してやらない事の如き、また何もかも、父母長者が干渉して徒らに子女の依頼心を増長する事の如き、その主なるものである。その干渉の甚だしい例は、かの家風とか云ふものを笠に着て舅姑が新婦にのぞみ、甚だしきは所謂生木をさくといふやうな場合にも立ち至る事である、また祖先を重んずるの結果自ら保守思想を養ふて、日に月に進みゆく時勢の進運におくるといふやうな事も、たしかに此の主義の生み出す惡

弊の一つである。ついでには父母長者なるものは子女に對して、特に相當の年齢に達した時には、其自尊心を尊重してやつて、たとへば訓戒を興へる場合の如きも、どこまでも、その名譽心を傷けない程度に於てし、其子に嫁を迎へたと云ふやうな場合には、あまり新夫婦の生活に容喙しないやうにしたり、またいたづらに其子女を愛するあまり、其度が過ぎて其進取の氣象をおさへついたりせぬ事もまた大切な事と思ふ。かやうな考で、父母長者が其子女に對してゆけば、自然と家庭内に於ては、家族主義と個人主義の調和がのみこまればせぬかと思はれる。

次に、家の外、委しくは學校に於て、廣く社會到る所に於て、各當路者が心得べき事があると思ふ。それは恰度家族主義の場合に述べた通りに、個人主義の生み出す弊害をその頭において、學生なり、一般人民なりにそのむ事である。個人主義の伴ふ弊害も隨て多くあるけれども、その主なる

ものは、個人を重んじ人格を尊ぶ所から、何事も自己中心となるといふ事である。自分の都合さへよければ他の利益をば少しも顧みないと云ふ態度即ち之れである。従つて此の主義のものとに生活するものは、往々にして無規律に流れるやうになる。かの學校や經濟界に於けるストライキのやうなもの、其原因をこゝに有して居るのである。

西洋に行はれるといふ恐ろしい社會主義とか虚無主義とか云ふやうな、恐ろしい運動もまた此の泉から流れ出る流れに外ならないのである。ついでには、教師が兒童に接する場合にもまた企業家が労働者傭人に接する場合にも、官吏が一般人民に接する場合にも、一方に於て是等の人々の人格權利を尊重すると同時に、他方に於て服従の美德なる所以、共同精神の社會國家に立つものに取つて是非缺くべがざる理由を教へて、一定の規律のもとに、自由なる、活動を營み、規則法律の價値を認めつゝ、自主獨立の生活を遂げさせるやうにせねば

ならない。此點から考へると、我が國の法律も政治もまたよほど改良の餘地の存して居るといふ事

は、夙に識者の口にし筆にする所である。

(文責在記者)

子供が物を口へ入れる癖

宮 本 仲

子供には、口の中へ物を入れる癖のあるものです。

指をくわへる、おもちゃをしやぶる、袂をかじる、これは子供の天性で、母の乳首をはなれた口の中がさびしいので、いろ／＼の物を入れて居る事が其精神を慰めるのでせう。

しかし、これは大層危険な事です。此の何でもかまはず甜める事はいろ／＼の病氣の原因になりやすい、甜める物品に附着して居る微菌を吞み込むので咽喉の病氣にかゝつたり、猩紅熱やデフテリアや種々の傳染病にかゝつたりする。それで此の癖は嚴重に矯正しなければなりません、育て

やうによつては此の癖をつけずにすまず事が出来る、母か乳母がついて居て嚴重に注意すれば、口の中へ物を入れぬやうに育てる事が出来ます。

たとへば、乳をのませる、飲み終ると同時に乳首をはなしてしまふやうにする。口もとがさびしくて指をなめたりする時は、指に、害ならぬ苦い薬をつけるとか、はつかをつけるとかして之を禁制すると云ふやうにするのです。かう云ふ風に育てた結果宅の子供は幸に、一人も口の中へ物を入れるものはありませんでした。

幼稚園などで土いぢりをして、土の中にある腐敗微菌に原因した大腸かたるなどを起す事があ